

女にとっての戦争 1

「ひととき」欄の三〇年から

影山 三郎

中村 智子

草の実会

編



ERRE
ES FEMMES

ELLE NE FAIT PAS L'AMOUR ELLE AIME
VOUS AIMEZ LA MÊME CHOSE OUELLE FAI

彼女が愛するのと同じようにあなたが愛するのと同じように
彼女が愛するのと同じようにあなたが愛するのと同じように

FAIT PAS L'AMOUR ELLE
LA MÊME CHOSE OUEL

彼女が愛するのと同じようにあなたが愛するのと同じように
彼女が愛するのと同じようにあなたが愛するのと同じように

女にとっての戦争 1

「ひととき」欄の三〇年から



郎・中村智子・草の実会 編

田畑書店

女にとっての戦争①

定価 1500 円

1982年 7 月15日 第 1 刷発行

編 者 影山三郎／中村智子／草の会

発行者 石田 明

発行所 株式会社 田畑書店

〒107 東京都港区赤坂4-8-19 表町ビル301号

電話代表03-403-5819 振替東京5-103763

印刷・文栄印刷 装本印刷・アジア企画群 製本・山本製本所

© 1982

0031-310163-4429

女にとっての戦争②

——「ひととき」欄の三〇年から——

影山三郎・中村智子・草の実会編／82年8月刊／全2冊完結

第二冊は一九六八年（昭和43）から一九八二年（昭和57）三月まで、十四年余からの一六五篇を選んで収録します。解説『ひととき』の趣旨と役割」（影山三郎）
『女にとっての戦争』へのご感想など、ぜひお聞かせください。

女にとっての戦争①

「ひととき」欄の三〇年から

なんの鳥か

B 52 にあふられて

沖繩の鳥は

石藪をひくくとぶ

金子きみ

はじめに

朝日新聞の「ひととき」欄三十年間の投稿の中から、戦争に関係のある文を集めて出版したい、草の実会もぜひ協力してください、という、思いがけない素晴らしい企画に、会としてよろこんでお手伝いさせていただきました。

思えば、長い封建時代のくらやみの中で、庶民は、男でさえも自分の考えを持つことを許されず、ひたすら「御上」を信じ、お国のために働いて生きてきたのです。それが「聖戦」と信じこまれた十五年戦争にとつながら、国民は「お国を守るために」とすべてを犠牲にして戦争に協力したのでした。

広島、長崎に、人類史上最初の原爆を受けた日本は、焦土の中で敗戦を迎えました。衣食住のすべてを根こそぎ奪われた焼跡の中で、私たちは、人間の生命と平和の尊さを身をもって知りました。廃墟から涙を拭いて立ち上がり、再び歩き出そうとする日本人にとつての新しい道標は、永久に戦争を放棄することをうたった第九条をもつ平和憲法でした。

——政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。——

敗戦によって打ちのめされていた男たちよりも、女たちは覚めるのが早かったのです。敗戦によって女たちは開眼したとも言えるでしょうか。平和憲法と選挙権を手にした女たちは、はじめて家庭から外へと目を向け、声を出しはじめました。

一九五二年（昭和二十七年）、朝日新聞に生まれた「ひととき」欄は、まさに頭のとっぺんに窓が開いて射し込んできた光りのよう、噴き上げる女たちの思いが洪水のように、「投書」という形になって明るみに持ち出されました。けれども、その頃の輝かしい光りの中にも、朝鮮戦争の黒い翳りがあり、耳をすませて軍靴の響きを聴く声が、はやくも「ひととき」の中に記されています。

以来三十年、社会の変動と共に女たちの思いも揺れ動きましたが、悩み、考えながら成長していこうとする姿が「ひととき」欄に浮き彫りにされていて、平凡な主婦であり、母親であり、社会の一隅で働いている無名の女性たちの、それぞれの生活の場からの、平和を願う生の声は、ひとすじの絶えることのない流れとして、そのまま貴重な女性の戦後史を刻んできたと思います。

「ひととき」欄に、同じ思いを寄せあった人たちによって作られた私たちの草の実会は、創立以来二十七年、「明るい社会をめざして手をつなぎ」「道ばたにも種を落として根づよく実をつけてゆく一粒の草の実」（創立趣意書）として、地味ではあってもたくましく歩ん

できました。防衛費が「突出」的に増強され、軍事大国への道が踏みだされたいま、私たちは、あらためてしっかりと、出発の初心をみつめなおさねばならないと、思いをあらたにしています。

徴兵は命かけても阻むべし 母祖母おみな牢に満つるとも

これは会員の石井百代さんが朝日歌壇に寄せた歌ですが、この熱い心を芯にして、私たちは八月十五日の敗戦の日を忘れまいと、小さくとも「十五日デモ」をつづけ、手製のプラカードとビラで、道行く人の共感を集めてきました。

平和を求める世界中の人びとの願いにもかかわらず、いま、米ソをはじめとする大国によって、六十億の人類を数十回も殺戮できる恐ろしい規模の質量に達した核兵器が保有されています。いのちもくらしもくにも文化も、すべてを白熱の閃光の裡に破壊してしまう核戦争を地球上からなくさなければなりません。

「平和のために、一粒の勇気を集めて」(草の実会・一九八二年総会のテーマ)、私たちも、反戦・反核・核廃絶を求める世界中の民衆の大きなうねりの中に加わり、それを推し進めるささやかな力になりたいと思います。そうした願いもこめて、私たちは、この本を世に送り出す仕事の一端を担わせていただきました。

ここに収録された文章を書いた方にはたの中には、今はもう故人になられた会員もあり、いつのまにか娘が投稿時の自分の年齢になったといわれる会員もあって、感慨深いものがあります。この一冊によって新しい光りをあてられて蘇ったこれらの文章は、長い年月の

流れに洗われても、輝きを失っていません。「ひととき」は母が娘に戦争体験をつたえる架け橋となってきました。私たちはわたちの戦争と平和を主題にまとめられたこの本を、とりわけ戦争を知らない若い人びとに贈りたいと思います。そして、女にとって戦争とは何かを考え、対話する、場所と機会を広げていきたいと願っています。

一九八二年六月

草の実会

小野 和

金子 きみ

熊井志津子

女にとっての戦争① — 目次

まえがき 草の実会／小野和・金子きみ・熊井志津子 ㍿

一九五二年（昭和27年）

母たちのため息 熊井志津子 ㍿
 原爆の少女たちに 細溪 正子 ㍿
 子供を守るため…… 倉持ひろ子 ㍿
 水爆の実験 小野沢君子 ㍿
 城ヶ島にて 石川 瑤子 ㍿

一九五三年（昭和28年）

戦車の地ひびき

岡谷志摩子 ㍿

船足の音を聞きつつ 未亡人と特需 旭川このごろ 男の子の夢 八月六日 八月十五日 中学生と戦争映画 思いがけない来客 このごろゆううつ 君死に給ふことなかれ

村沢テル子 ㍿
 木村 誠子 ㍿
 大場 智子 ㍿
 中山千代子 ㍿
 安藤 貞香 ㍿
 赤堀あい子 ㍿
 松平 芳子 ㍿
 白岩 栄子 ㍿
 杉本 治子 ㍿
 北沢 君枝 ㍿

古いチャップ台
石も叫ぶべし

一九五四年（昭和29年）

国民のいのちと再軍備
原爆マグロの恐ろしさ
原爆症の美しい友
X線技術者の妻
限らない孤独
魚屋の娘として
ルーズベルト夫人に感謝
放射能の雨
慣れっこになるな
九年前の傷うずく
あるクエーカー教徒の母親
久保山さんの死に想う
少年自衛隊のこわざ

大塚 多美 ム
原 伊久 ム

山形の炭焼小屋から

一九五五年（昭和30年）

中国から帰国して十年
季節めぐり来る時
卒業式をおえて
イタリヤからの旗
日本母親大会に出席して
母親大会で思ったこと
自衛隊のうた
原爆症への恐怖
ああ、今年も生きられた！
特車の不気味な砲口
日ソ交渉に祈る
石川達三さんへ
オネスト・ジョン
さつまいもの味

高田 雪枝 ム
ほりしづこ ム
米田 葉子 ム
富田富佐子 ム
政田 章子 ム
青木 薫子 ム
九里 雅子 ム
虎谷 信子 ム
山根 清子 ム
鈴木 俊子 ム
大森 和子 ム
川名多恵子 ム
原田 初代 ム

印野千代子 ム

大須賀清子 ム
福岡 弘子 ム
飯窪恵紀子 ム
匿名希望 ム
水谷 幸子 ム
永田みどり ム
榎本 芳枝 ム
木下 朝子 ム
奥田れい子 ム
高橋 ツネ ム
大津 一女 ム
伊藤 利子 ム
大黒 敏子 ム
金井寿美子 ム

魯迅未亡人の手記によせて
ハバロフスクの写真に憶う
神宮球場と私

一九五六年（昭和31年）

うこぎのおひたし
こどもの日によせて
あやめ城のあと
沖繩を郷里にもって
息子
沖繩に平和を
原水爆禁止運動に参加して
沖繩と原水爆禁止運動
満州野の遺骨の喜び
家庭の灯を守る女性たち
「避難民」はもうこめん
今年をふりかえって

古島 琴子 82
松下 暢世 83
窪島 睦子 85

荒井きく子 88
広田 豊子 89
細野多知子 92
仲里 京子 93
仲川 いち 95
成光 和子 96
石島 京子 98
大野 文子 101
板垣 享子 102
柴崎 初枝 104
斎藤トミノ 105
今村 光子 106

一九五七年（昭和32年）

防衛費を削ってください
死んでほめられるより……
もっと易しく、訴える記事を
憲法を読みましよう
次の世代に降る恐怖
原子力の村から農婦のお願い

市毛 榮 110
浅井 千里 111
小林 利果 112
堀江 秋子 114
笠原 美恵 115
埜 ぎく代 116

一九五八年（昭和33年）

「信仰の暴力」に負けるな
兵隊を喜劇化しないで下さい
悪魔の記憶
原爆の傷は生きてる
続・悪魔の記憶
被爆者の生活を守ろう

匿名希望 120
中村 静子 121
桑田 竜子 122
福田 二三 124
富田 清子 125
本間 典子 127

映画『千羽鶴』と文部省

私にでもできること

どんな国にも、どんな町にも

原水爆禁止大会によせて

戦争体験を書いて

原爆症の夫を入院させたいが

この美しい行進を、母に

大砲や戦車の列を見ながら

夫の見た夢

一九五九年（昭和34年）

はかまをたたみながら

おにぎりに思う

原爆記念日とおなかの子

戦争のツメあととはまだ……

水蜜桃をむきながら

傷痍軍人の妻は悲し

岡野 稔子 158

渥美 京子 156

篠田 良子 154

塚本 順子 152

牧瀬 菊枝 154

小幡 国子 155

滝沢あい子 157

小畑 喜子 158

信太 正子 156

遺族の生き方

沖繩に苗木がほしい

映画『ああ江田島』と若い人たち

朝鮮人の髪の毛で編んだくつ下

一九六〇年（昭和35年）

善意とは積極的な生きる力

「十日の別れ」に思うこと

ラオスからの便り

防衛庁からの注文拒否

「精神とメシ」で夫婦問答

常夏の故郷、小笠原島

「おかあさんの宿題」に感慨

街頭で署名しながら

自衛隊員の投書に寄せて

日系米人の友へ

グアム島生き残り日本兵の教訓

井上 糸英 152

河野 弘子 154

山岸 克子 155

斎藤 貞子 157

紀伊 艶子 160

榎 文子 161

砂屋敷美恵子 162

村山 桂子 164

高橋 雅子 165

匿名希望 166

南雲 すみ 168

大石美千子 170

春川まさ子 171

石橋 晴美 173

清水千枝子 174

熱意をもつと地道な方法で

田島 清子 175

この地図のどこかへの旅

小林佐智子 202

米青年に安保反対の真意を

中村 一枝 177

遺族のシベリア墓参と母の願い

広田英美子 203

私たちの集まり

薬袋みゆき 179

遅いけど……憲法読む母の会

大江 みち 180

平和な主婦の時代は過ぎたか

山田美恵子 182

早く忘れたい八月六日の悲しみ

匿名希望 183

母性愛を平和にそそごう

匿名希望 206

傷兵たちの一群

田中 美智 185

ひな人形を捨てた悲しみ

安部 蕉 207

私の学んできた民主主義

村松 愛子 186

小さな声集めて核兵器の絶滅を

安達みお子 209

戦争のない世界を

田中美代子 189

「池田総理を囲んで」のテレビ

伊丹 久子 210

子供たちの幸福を祈る

早川智恵子 191

私の八月九日

青野 悦子 212

もし女の子だったら……

原田さえ子 194

わが家の菜園にて

渡辺まさ子 214

戦死した息子よ安心しておくれ

石浜 きみ 195

終戦記念日に思う

村田 静子 215

一九六一年（昭和36年）

戦争未亡人と減税

長沢三枝子 198

集団疎開した妹の思い出

村松 弥生 216

かあさん、つらかった

匿名希望 199

キューバ危機に思ったこと

松沢 昌子 217

リバイバルの軍歌

市原まゆみ 200

矢ガスリ模様のはんてん

間瀬きみ子 218

笠原 芳江 219

一九六三年（昭和38年）

ケネディの死と北京の子供たち
知らないことの恐ろしさ
立木 達子 232
古川 ユリ 233

一九六四年（昭和39年）

あなたと呼びかけるもの
わが家の災害避難訓練
白山 ユキ 236
倉田ゆり子 237

一九六五年（昭和40年）

アメリカの友も悩んでいる
教えよう、戦争の恐ろしさ
『未完成交響曲』と娘と私
夜桜と空襲の思い出
お米をかついだ修学旅行
浮田 久子 238
楨 文子 239
藤田千枝子 233
桜井 愛子 234
土屋まさ子 236

従軍看護婦の思い出と祈り
心痛めるベトナム報道
戦争体験の文集『嵐』を読んで
雑草と強制連行の朝鮮人
原爆で散った兄と友人たち
原爆跡に「ミナブジ」の父の文字
収容所で生れた子も二十歳に
いたいけな戦争の犠牲
戦争を知らぬ娘から母親へ
山口 重子 237
山田 昭子 238
岩崎 多鶴 239
熊倉ひろ子 240
室野 芙美 241
本橋 正子 244
岩崎 いさ 245
堯 信恵 247
新津とも江 248

一九六六年（昭和41年）

兄の遺骨に平和を祈る
胸をつかれた捕虜の写真
菜切り包丁に二十一年の感慨
漱石の『こころ』にうたれて
空襲とヤミ市と京人形
「母さん、おにぎり、おにぎり」
田熊 千代 249
堀畑美代子 253
吉田 竹代 254
石沢 スゲ 255
大野 治子 257
多田 慶子 259

隣組結んだ亡夫の絵日記

中島さと子 261

一九六七年（昭和42年）

ひな人形への強い愛着

岡村 彩子 264

「血液型」と暗い思い出

後藤 信子 265

ベトナムへ帰ったある米兵

田中みよ子 266

反戦ちようちん行列に参加して

永網 泰代 268

敗戦記念日のスイトン

井上 照子 269

被爆者のこの声を聞け

小野 和 271

あとがき 中村智子 274